



アトリエにて

「ぼくも ちきゅうの てんと てん。」と手をつなぐ、クマやゾウ、カメ、ペンギン…。大阪市教育委員会が発行(大阪市立総合生涯学習センター制作)した、人権を考える絵本『てんとてん』(原作・すぎもとれいこさん)の最後のシーンである。作画したのは、絵本作家の「ふくだとしお+あきこ」さんだ。としおさんとあきこさんの夫婦協同作業で、動物をモチーフとしたぬくもりのある絵本を生み出している。

#### プレゼントに絵本を手作り

伝統工芸の工房でデザインを担当していたとしおさんは、「自分のことを誰も知らないところで絵に打ち込みたい」と26歳で渡仏。そこで留学中のあきこさんと出会い、誕生日プレゼントに手作りの絵本を贈った。

「絵本を作るのは初めてだった。1枚の絵とは違い、展開していく面白さがあることを知った」墨や千代紙を使った和風の手作り絵本があきこさんの心を射止めた。

帰国後は2人で絵本づくりに取り組み始めた。初めて出版した絵本『うしろにいるのだあれ』は、皇太子ご夫妻の長女愛子さまのお気に入りの絵本として話題になる。「そんなに反響があるとは思っていなかったけれど…」順調に絵本作家の道を歩みだした。

#### 企画から協同作業で制作

住まいと兼ねたアトリエは「出来上がった絵を作品としてイメージしやすいように」と真っ白な壁に囲まれている。部屋の真ん中にあるキッチンを作業台にし、「好きなことを仕事にできる喜び」をかみしめながら作業に没頭する。

主にデザインはとしおさん、色彩はあきこさんが担当する。例えば、としおさんが「温かい雰

囲気で軽くない色の犬にして」など漠然とした言葉で示す色を、あきこさんが自分のイメージも加えて作っていく。「想像していたものとまた違ったものが出来上がってきて、それがいいコラボレーションになる」

登場人物はいつも動物である。「小さいころから接することが多かったけれど、今の子どもたちはそんな機会も少ない。もっと距離を縮めて身近に感じ、興味を持ってくれたら嬉しい」という思いからだ。

#### 良き“アドバイザー”は愛娘

2人が最も頼りにしているのは、昨年12月に生まれた娘・にこちゃんだ。「絵本1冊分、15～18枚の原画を部屋に並べて、子どもに見せてみる。そうすると、ずっと見続ける絵とそうじゃない絵に分かれる。子どもの目を惹きつける色や形状などを探るヒントになる」

子どもを抱いて散歩に行く機会も増え、部屋でもりきりになって作業しているところと視線も変わった。「季節の変化を肌で感じられるようになり、自分が子どものころのことを思い出したりする」心に余裕が生まれた。

ずっとこだわり続けているのは、伝えたい大切なことは前面に出さず、そっと散りばめること。「子どもたちにはすぐに分かってもらいたいとは思っていない。小さな種みたいに残って、大きくなったときに『昔読んだ本はこういうことをいっていたのかな』と気付いてもらえたら」

種が芽吹き実を結び、また新たな種が蒔かれることを願う。

(文・江中咲紀 / 写真・高島悠介)

CLOSE  
クローズアップ  
UP

# 大切なことは、 絵本でそっと伝えたい

## プロフィール

絵本作家

## ふくだとしお + あきこ さん



ふくだとしお = 1971年、大阪府生まれ。94年大阪芸術大学卒業。98年、制作活動のために渡仏。帰国後、絵本制作を始める。ふくだあきこ = 78年、兵庫県生まれ。97年からフランスに美術留学。帰国後、武蔵野美術大学短期学部に入學し2002年卒業。ユニット「ふくだとしお+あきこ」= 絵本、デザイン、イラストレーション、絵画、壁画など様々な作品を手掛ける。絵本の主な作品に『うしろにいるのだあれ』シリーズ、『おおきくならたら』、『みんなかめ!』、『ビネくん』シリーズ、『とんでいったりんご』、『いきものいろいろ』、『ぴっちゃんぼっちゃん』などがある。動物をモチーフとした雑貨ブランド「accototo」も展開。

「第11回『はーと&はーと』絵本原作コンクール」の絵本の原作を募集します。詳しくは7ページをご覧ください。